

位置と環境

遺跡は、標高約260mの通称上野原台地に立地し、10の地点からなる複合遺跡である。この内2～7地点は（4工区と呼ばれ）台地の北側に位置している（第1図）。

調査の経緯

遺跡は、国分上野原テクノパーク建設に伴って、県教育委員会が調査主体となり昭和61年の1地点の調査から開始された。2～7地点は平成7年度～平成9年度にかけて発掘調査が実施された。調査面積は、約56,000㎡におよぶ。

遺構と遺物

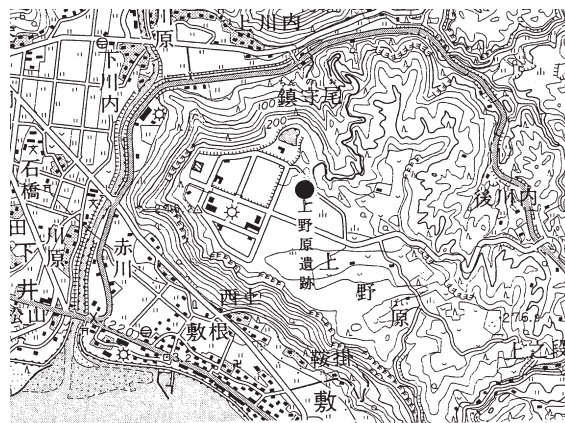
発掘調査の結果、縄文時代早期・前期・後期・晩期や弥生時代・古墳時代・古代・中世・近世に渡る遺構・遺物が発見された。平成8年の調査で発見された2・3地点の縄文時代早期の遺構・遺物は特に注目され、遺跡は国の史跡に指定されている。

2・3地点における縄文時代早期の遺構としては、竪穴住居跡52軒、連穴土坑16基、土坑約270基、集石100基、道跡2本が検出された（第2図）。

竪穴住居跡は、1辺が2～3m前後の隅丸長方形で、一部の竪穴外部からは竪穴をめぐるように直径約20～30cmの柱穴が発見された。また、竪穴内部に桜島の火山灰（P-13・Sz-Tk3）が発見され、火山灰の年代やその下から発見された炭化物などの年代測定から約9,500年前のものであることが判明した。なお、桜島火山灰（P-13・Sz-Tk3）は、床面直上からの堆積ではなく、ある程度土が堆積した後の堆積である。このことは、桜島火山灰の降灰以前に集落が形成されていたことを示すと考えられている。

連穴土坑は16基が検出されているが、未調査の土坑などの一部はこの遺構である可能性も考えられている。大小2つの穴が地下で連結する特徴から、トンネル部分が崩落した後、そこを足場にして新たなトンネルを構築しているものも見られるなどの効率的な掘削方法がとられているものもある。この連穴土坑の床面からは大量の炭や焼土が見つかったものもある。この連穴土坑内からも桜島火山灰（P-13・Sz-Tk3）が確認されている。

土坑は、約270基が確認された。大半のものは半



第1図 上野原遺跡の位置

裁ないし確認のみで調査を終了しているため、明確な基数ではない。この土坑は、円形や楕円形、あるいは方形といった形状を呈している。この中でも、楕円形土坑と思われるものが密集している部分が2か所あり、その用途も含めて今後検討していかなくてはならないものである。

集石は、100基が確認された。掘り込みがあるものとないものがある。この集石に用いられている礫は、上野原遺跡周辺で採取される安山岩が多い。中には磨石や石皿を用いているものも見られる。

道跡は、南北に2本確認された。人工的な造成等は確認できなかったが、ほかの遺構が重ならない点などから、自然の谷状地形を利用した道的な役割を果たすものとしての位置付けをおこなった。

このように、当遺跡からは多数の遺構が確認され、このことは当地が生活に適した環境を備えていたことを示すものと思われる。

遺物は、縄文時代早期の遺物の他に縄文時代晩期や弥生時代・古墳時代など各時代の様々なものが出土している。この中でも、加栗山式土器をはじめとする約9,500年前の土器や石鏃などの石器の他に、軽石製加工品や土器片加工品などが出土している。

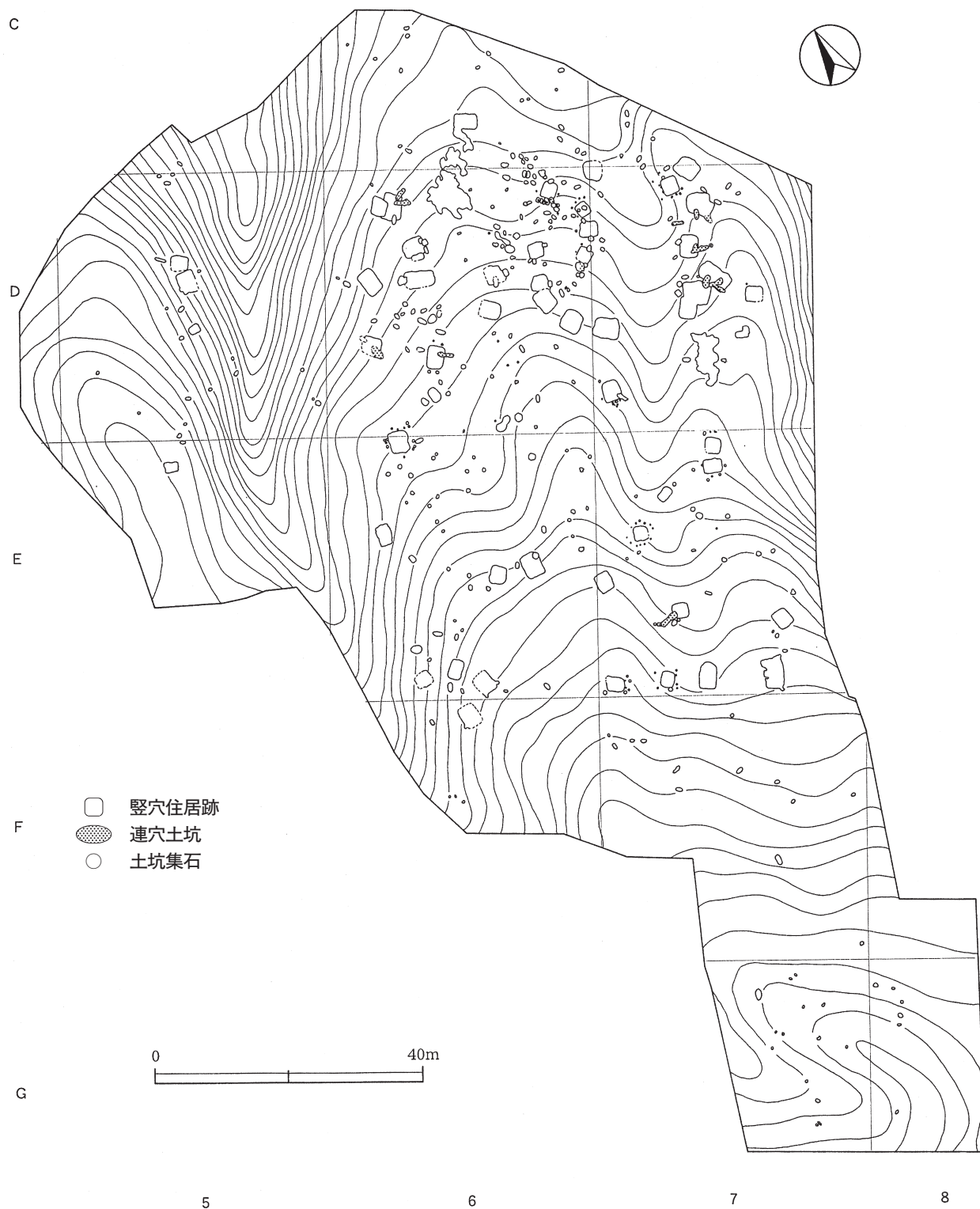
資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。また、一部は上野原縄文の森展示館に展示されている。

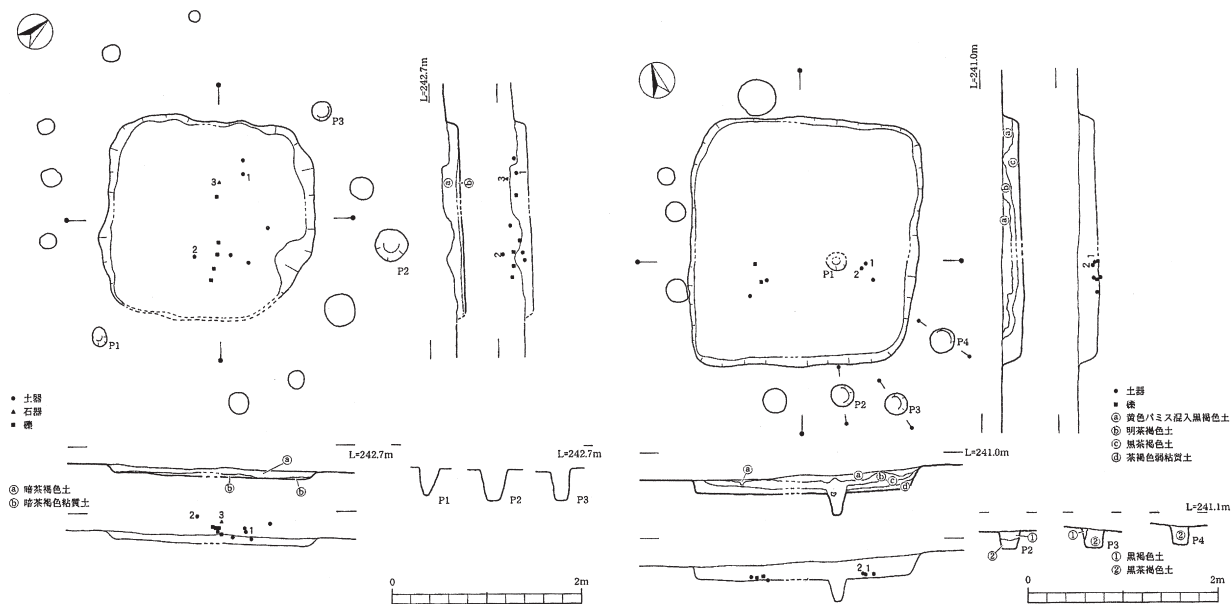
参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002「上野原遺跡第2～7地点 縄文時代早期編」『鹿児島県立埋蔵文化財センター埋蔵文化財調査報告書』41

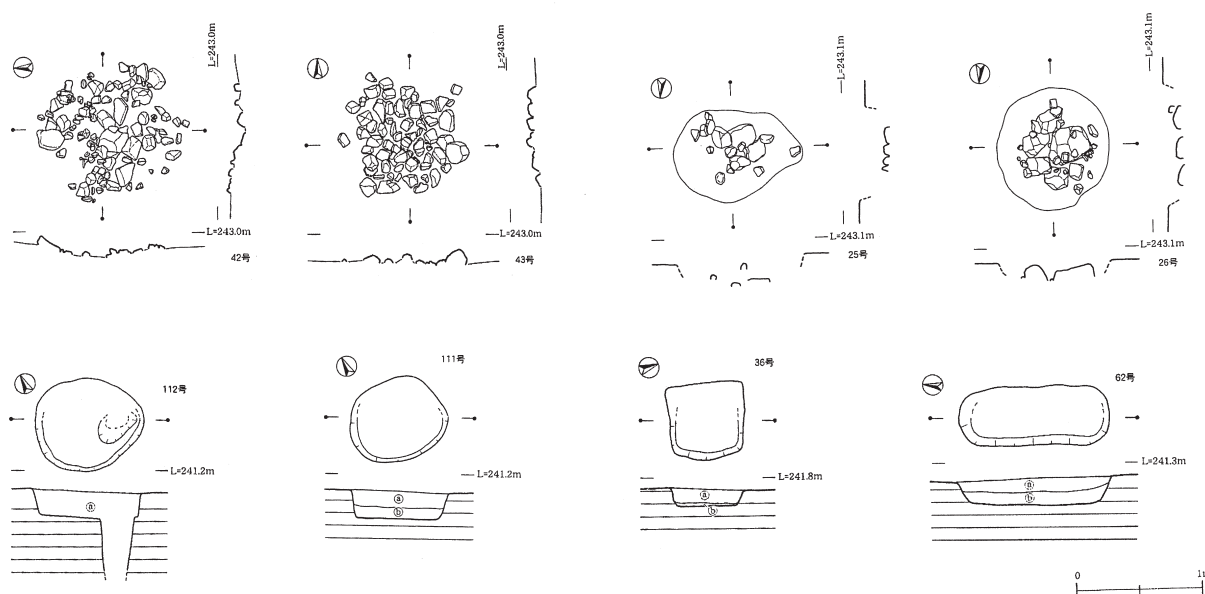
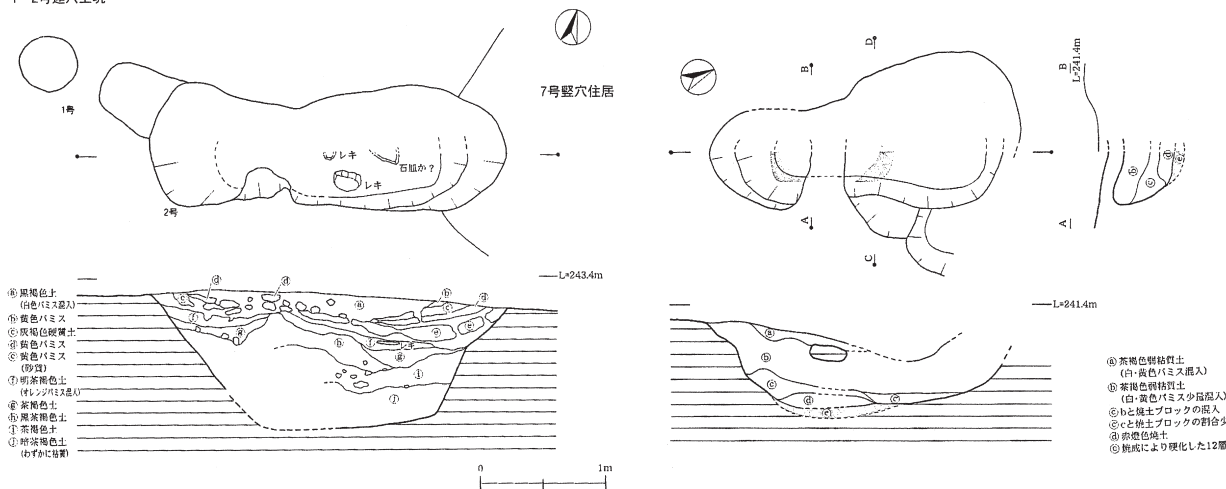
(黒川忠広)



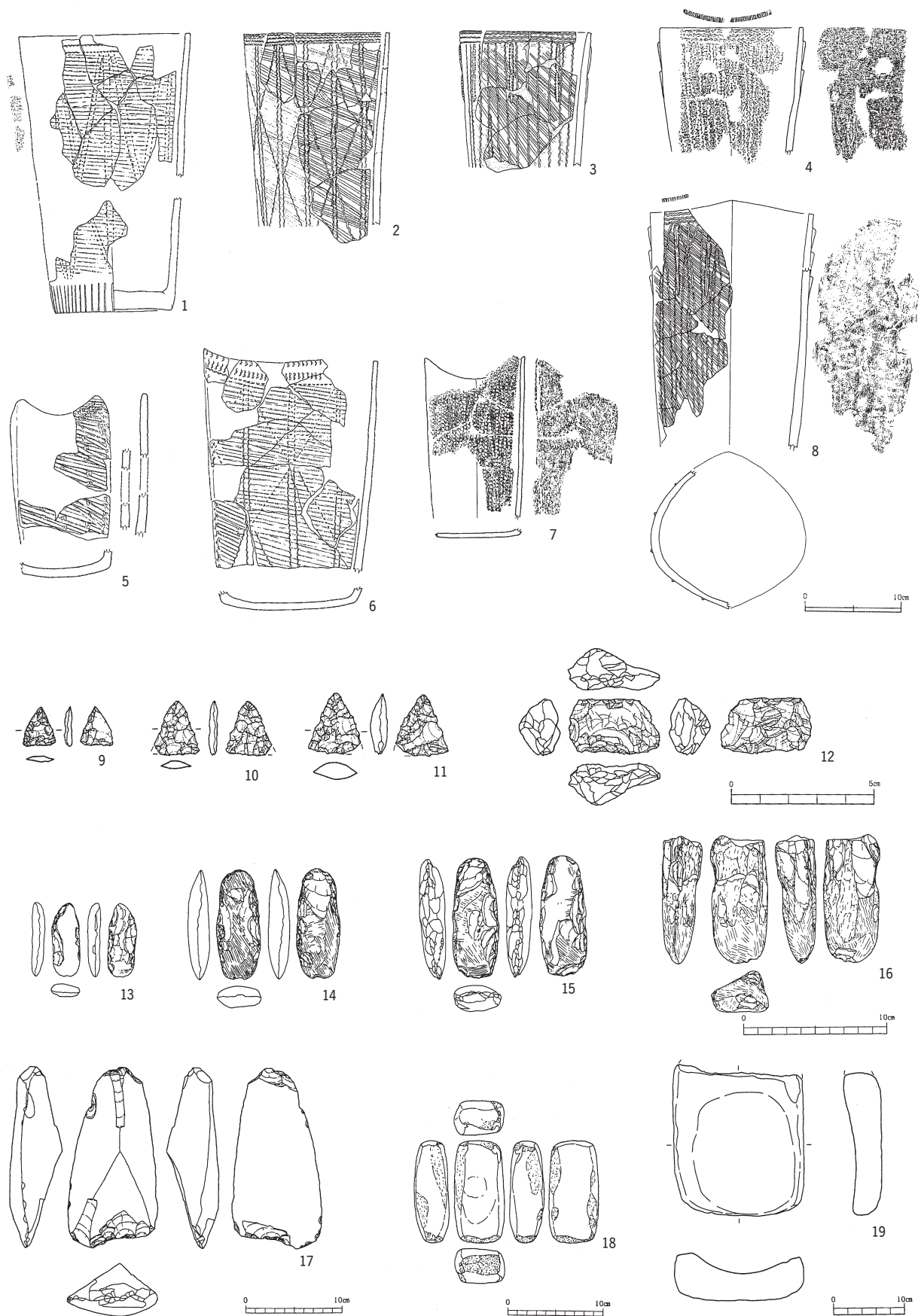
第2図 遺構配置図



1・2号連穴土坑



第3図 縄文時代早期の遺構



第4図 縄文時代早期の遺物